



第2章 高校生の学習観・成績観

第2章 高校生の学習観・成績観

耳塚寛明

(お茶の水女子大学助教授)



第1節 高校生の成績観

1. 現在の成績の自己評価

【中位の3カテゴリーに6割が集中。女子にちょうど真ん中が多く、男子はその分相対的に下位に位置づける傾向がある。第1回調査と比較すると大きな変化がみられる。「上のほう」(選択肢1)と「上の下」(同2)の比率には変化がないものの、「中の上」(同3)が約7%、「真ん中」(同4)が約2%、第1回から2回にかけて減少し、代わりに「中の下」以下のカテゴリー(同5~7)が増加している。】(図2-1~3)

Q 8

あなたの学校での成績についてうかがいます。

A. 現在の総合的な成績は、学年の中でどのくらいですか。

B. あなたはどのくらいの成績がとれたらいいと思いますか。

C. それでは、現在の成績は別として、あなたがうんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思いますか。

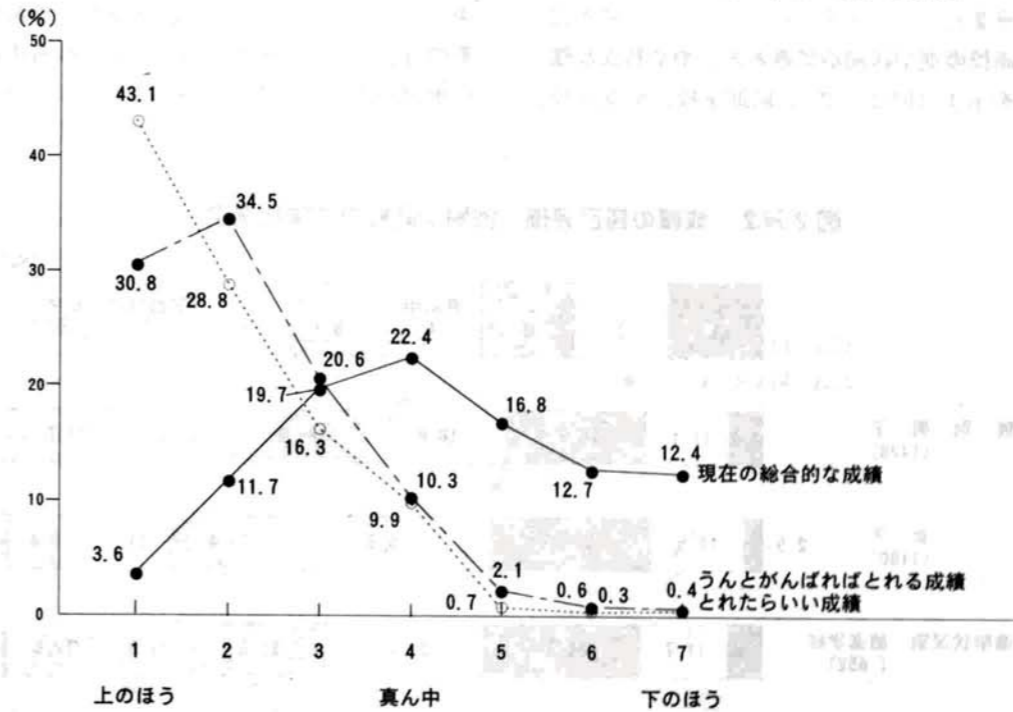
高校生は自分の成績をどう位置づけているのだろうか。今回の調査では、高校生の成績

観を、(1) 学年の中で総合的な成績の自己評価、(2) どのくらいの成績がとれたらよいか、(3) 現在の成績は別として、うんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思うのか、という3つの側面に分けてとらえた。それらの単純集計を示したのが、図2-1である。

はじめに、学年の中で総合的な成績の自己評価を見てみよう。選択肢は「上のほう」(選択肢1)から「真ん中」(同4)を経て「下のほう」(同7)まで7段階に分けて、いずれかの段階を選択させた。

全体としてみると、「真ん中」(同4)とその前後(同3および5)の3カテゴリーに58.9%が集中しており、自己の成績を真ん中あたりに位置づけている生徒が多数派であることがわかる。回答を相対的に「上」(同1、2、3)、「真ん中」(4)、相対的に「下」(同5、6、7)に3分してみると、それぞれ35.0%、22.4%、41.9%となる。「上のほう」よりも「下のほう」に偏った分布を示している。これからみると、学年の中で、真ん中あたりよりも下位に自分の成績を位置づける生徒のほうが相対的に多い。自己をトップ・レベル(選択肢1=最上位)に位置づけている生徒は3.6%とごくごく少数にとどまる。

図2-1 現在の成績・とれたらいい成績・うんとがんばればとれる成績



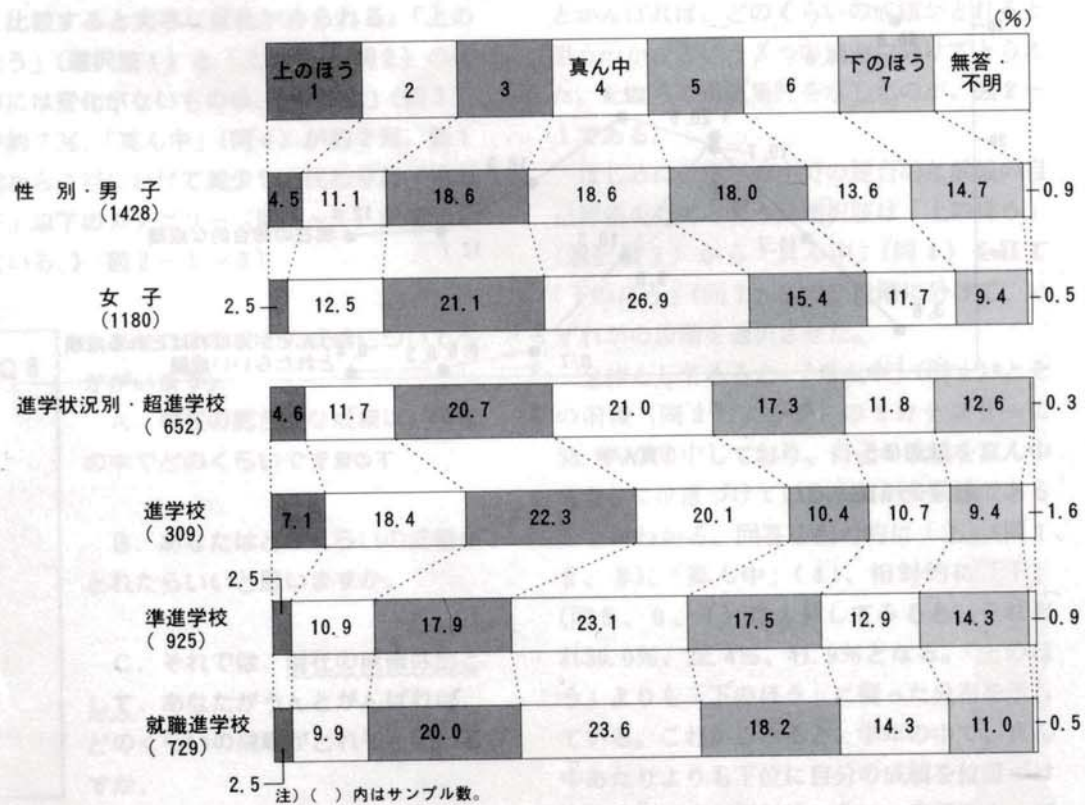
注) サンプル数は2615人。

性別にみると、女子にちょうど真ん中（選択肢4）が多く、男子はその分相対的に下位（同5、6、7）に位置づける傾向がある（図2-2）。

高校の進学状況別にみると、やや特異な傾向を示す（図2-2）。超進学校、準進学校、

就職進学校の分布はほぼ変わらないが、進学校（第2ランク）で、上位に偏った分布をみせている。進学校における最頻値は、「真ん中」ではなく「中の上」（選択肢3）である。その分、自己の成績を下位に位置づける生徒が相対的に少なくなっている。

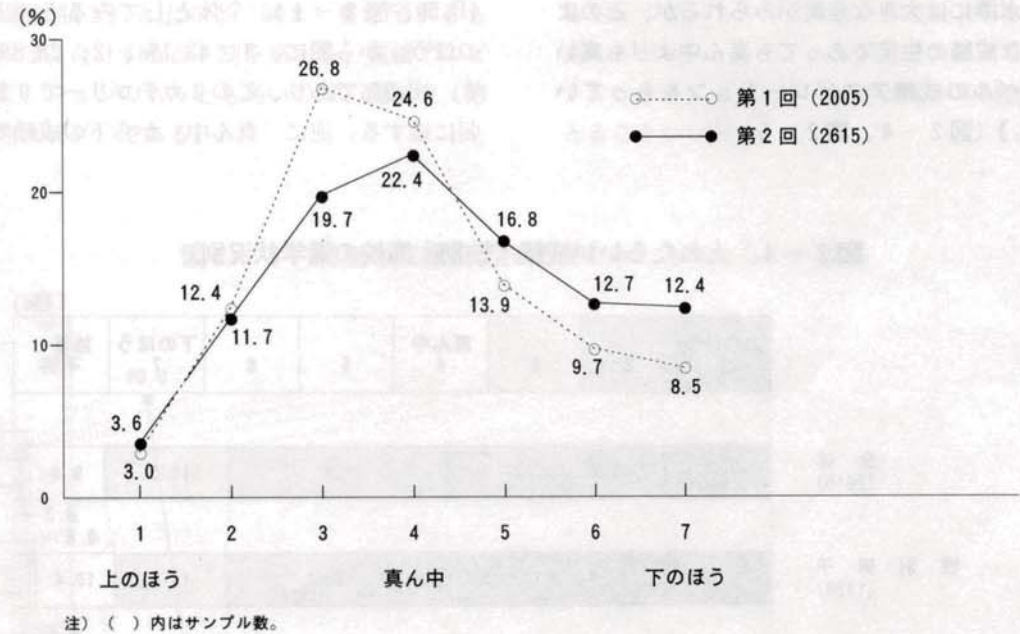
図2-2 成績の自己評価（性別、高校の進学状況別）



第1回調査と比較すると（図2-3）、大きな変化がみられる。「上のほう」（選択肢1）と「上の中」（同2）の比率に変化がないものの、「中の上」（同3）が約7%、「真ん中」（同4）が約2%、第1回から第2回にかけて減少し、代わりに「中の下」以下の

カテゴリー（同5～7）が増加している。全体として、第2回調査では成績を下位に位置づける生徒が増加した。第1回調査と第2回調査のおよそ5年というタイムスパンを考えると、この変化は大きなものといえるだろう。

図2-3 現在の総合的な成績（第1回との比較）



2. どのくらいの成績がとれたらよいか

【全体としてみると「上のほう」から順に、1. 43.1%、2. 28.8%、3. 16.3%であり、この3カテゴリーで9割弱に達する。逆に「真ん中」から下の成績でよいと答えた生徒は（選択肢4、5、6、7）合計でも約1割にとどまる。属性別にみると、希望する成績の水準には大きな差異がみられるが、どのような成績の生徒であっても真ん中よりも高いレベルの成績アスピレーションをもっている。】（図2-4、図2-5）

では、どのくらいの成績がとれたらいいと考えているだろうか。前項でみたのは成績の現実のレベルだが、次に、希望する成績の水準、アスピレーション（意欲）の側面を見てみよう。

回答は大きく「上のほう」に偏っている（P.59、図2-1）。全体としてみると「上のほう」から順に、1. 43.1%、2. 28.8%、3. 16.3%であり、この3カテゴリーで9割弱に達する。逆に「真ん中」から下の成績で

図2-4 とれたらいい成績（性別、高校の進学状況別）



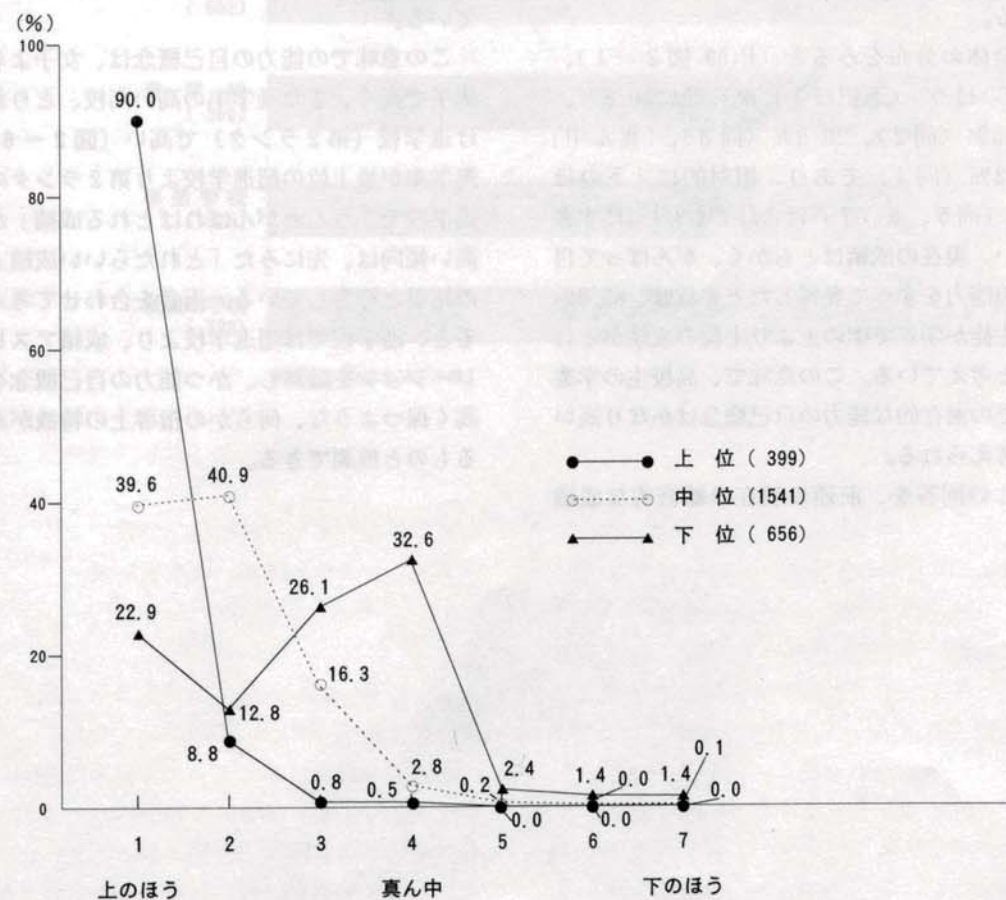
注) () 内はサンプル数。

よいと答えた生徒は（選択肢4、5、6、7）合計でも約1割にとどまる。成績に対するアスピレーションは、かなり高い水準にある。

性別には大きな差異はないが、高校の進学状況別には顕著な差異がある（図2-4）。超進学校や、特に進学校で、より上位の成績を望む者が多く、進学率の低い高校ほど上の方を望む者が減少する。といっても、進学率のもっとも低い就職進学校にあっても、上位（選択肢1）と上下（同2）を希望するものは、合計すると6割を超える。成績アスピレーションのもっとも高いのは、進学校（第2ランク）である。

現在の成績自己評価別にみると（図2-5）、非常に大きな差異があり、成績の自己評価が高い生徒ほど、より高い成績の水準を希望する傾向がある。しかし、現在の成績の自己評価が真ん中より下位の生徒であっても、大半が真ん中以上の成績を希望している。中の下より下の成績（選択肢5~7）でいいと考えているのは、どの成績層にあっても5%程度以下である。その水準に若干の相違があるものの、どのような成績の生徒であっても真ん中よりも高いレベルの成績アスピレーションをもっていると、この結果からは読みとることができる。

図2-5 現在の成績自己評価別にみたとれたらいい成績



注) () 内はサンプル数。

3. うんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思うか

【現在の成績はともかく、がんばって自分の能力をすべて発揮したとすれば、85.9%の生徒が学年で中の上より上位の成績がとれると考えている。これを能力の自己概念と呼べば、それは、女子より男子で高く、また進学率の高い高校、とりわけ進学校（第2ランク）で高い。】（図2-6、図2-7）

前回の調査に引き続いて、多少妙な質問だが、「現在の成績は別として、あなたがうんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思うか」を尋ねてみた。学業面での「潜在的な能力の自己概念」をとらえるための指標である。

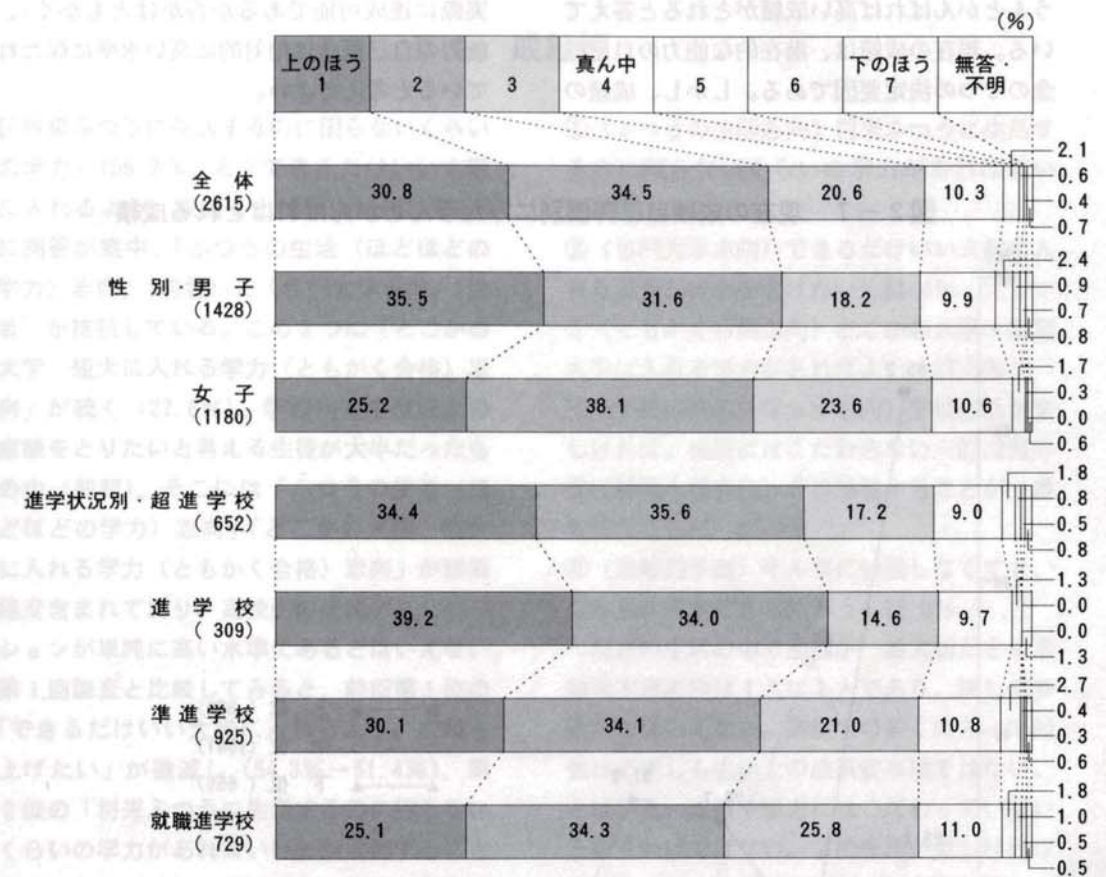
全体の分布をみると（P.59 図2-1）、「上のほう」（選択肢1）から順に30.8%、34.5%（同2）、20.6%（同3）、「真ん中」10.3%（同4）であり、相対的に「下のほう」（同5、6、7）は合計でも3.1%にすぎない。現在の成績はともかく、がんばって自分の能力をすべて発揮したとすれば、85.9%の生徒が学年で中の上より上位の成績がとれると考えている。この意味で、高校生の学業面での潜在的な能力の自己概念はかなり高いと考えられる。

この回答を、前述の現在の総合的な成績

（学年の中で）、希望する（とれたらいい）成績と比較してみよう（図2-1）。明らかに前者よりも後者に近い。このことはすなわち、たとえ現在の成績は下位でも努力次第で成績の上昇が達成できるという見通しを生徒たちはもっており、また希望する成績の水準もまったく根拠のないものではなく、能力の自己概念の高さという、主観的な裏付けをもったものであることを意味している。ただし、最上位（選択肢1）をとれたらいいと考える生徒は43.1%に及ぶが、うんと努力してそれが獲得可能だと考える者は30.8%にとどまっている。

この意味での能力の自己概念は、女子より男子で高く、また進学率の高い高校、とりわけ進学校（第2ランク）で高い（図2-6）。進学率が最上位の超進学校より第2ランクの進学校で「うんとがんばればとれる成績」が高い傾向は、先にみた「とれたらいい成績」の結果と符合している。両者を合わせて考えると、進学校では超進学校より、成績アスピレーションを鼓舞し、かつ能力の自己概念を高く保つような、何らかの指導上の特徴があるものと推測できる。

図2-6 うんとがんばればとれる成績（性別、高校の進学状況別）

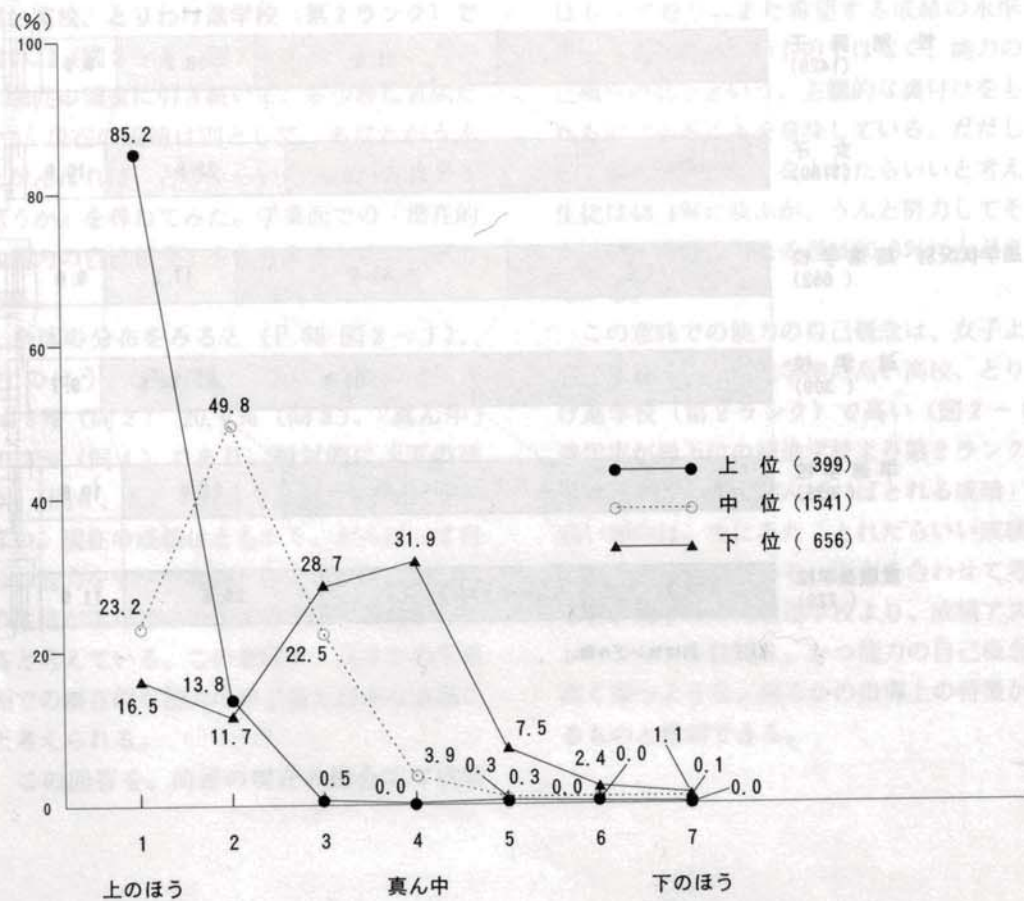


注) () 内はサンプル数。

現在の成績の自己評価と潜在的な能力の自己概念の間には明確な相関がある(図2-7)。現在の成績の自己評価が高い者ほど、うんとがんばれば高い成績がとれると答えている。現在の成績は、潜在的な能力の自己概念の1つの決定要因である。しかし、成績の

自己評価が相対的に下位の者であっても、うんと努力すれば中位以上の成績がとれると考えている者が9割近くに達しており(それが実際に達成可能であるか否かはともかく)、能力の自己概念は相対的に高い水準に保たれていると考えてよい。

図2-7 現在の成績自己評価別にみたうんとがんばればとれる成績



注) () 内はサンプル数。